「主の選びの素晴らしさ」
マルコ３：7-19

平吹光太　２３.１０.２２

本日の前の箇所は、イエス様が安息日に片手の萎えた人のいやしを行なったことで、パリサイ人たちとヘロデ党の者たちがイエス様をどのように殺すかの相談をし始めた事が書かれている。本日の箇所はその後の事で、福音が拡大するためにイエス様が成された大切な出来事が記されている。

I.　人々の思いと主イエスの御思い

「それから、イエスは弟子たちとともに湖の方に退かれた。すると、ガリラヤから出て来た非常に大勢の人々がついて来た。また、ユダヤから、エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうや、ツロ、シドンのあたりからも、非常に大勢の人々が、イエスが行っておられることを聞いて、みもとにやって来た。イエスは、群衆が押し寄せて来ないように、ご自分のために小舟を用意しておくよう、弟子たちに言われた。イエスが多くの人を癒やされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押し寄せて来たのである。汚れた霊どもは、イエスを見るたびに御前にひれ伏して『あなたは神の子です』と叫んだ。イエスはご自分のことを知らせないよう、彼らを厳しく戒められた。」（7-12）

イエス様のガリラヤ宣教の大筋が 7-12 節まで記されている。イエス様の元に様々な地域から多くの人々が押し寄せて来た。彼らの目的は病気の癒しや悪霊からの解放。当時の医療は現代と比べられない程、非常に乏しいもの。そのため、病気が癒されるならとイエス様の噂を聞いた大勢の人々が遠くから近くからイエス様の所に集まった。病気が治してもらえる手立てが無かった当時の人々にとって、どんな病気も治してもらえるお方の所に行くことはこの上ない機会。集まってくる病人達に対してイエス様は癒された。しかしイエス様は病の癒しよりも彼らに与えたいものがあった。それは人間の罪によって壊されてしまった父なる神様との関係を回復するためにわたし（イエス様）が遣わされており、わたしを通して永遠の救いの福音を受け取って欲しいことをイエス様は何よりも伝えたかった。

この世で病気が完治したとしても神を信じずに地獄に落ちるのなら虚しい。もし病気で亡くなったとしてもどんな悲しみも苦しみ悩みも無い天国で過ごすことが約束されているなら、私たちキリスト者は病気や死に心を縛られることはない。

けれども人々はイエス様の永遠の救いをもたらす福音の話に耳を傾けるのではなく、我先にと病気の癒しを求めイエス様に押し寄せた。そのため、まず病気の癒しよりも大切な福音を伝えるためにイエス様は弟子たちに小舟を用意させます。イエス様はガリラヤ湖に来た大勢の人々に静まり集中して福音の話を聞いてもらうために、弟子たちが用意した小舟に乗り、声が届く程の距離から岸にいる人々に福音を語られました。それは、神、罪、救いの事について、そしてご自身が罪からの救いを成し遂げられるために天から来られたことをイエス様は述べられた。

II.　12 弟子の任命

次にイエス様は全世界に福音宣教が広まるための準備をされます。

「さて、イエスが山に登り、ご自分が望む者たちを呼び寄せられると、彼らはみもとに来た。イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ、彼らに悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。」（13-15）

まず使徒とは、「使者、大使、特別な使命を帯びて派遣された者」という意味で用いられる語。新約聖書では、まずイエス様によって直接弟子として任命された者たちが使徒または弟子と呼ばれた。彼らは、まずイエス様の弟子となり、さらにイエス様の復活を目撃したものとして、その復活の証人となり、全世界に向かっての福音宣教に携わり、ご聖霊の力によって、さらにイエス様の弟子が生まれていきました（マタ 28:16-20、使 1:8）。

イエス様は約３年間の公生涯をお一人で宣教活動をするのではなく、使徒たちを選び福音宣教の働きを任せられるようにされながら宣教をされた。それは、ご自身が約３年後に天の御父の元に戻られることをご存知で、地上から去った後にも福音が途絶えることないように使徒たちを育てられ、全世界の人々に宣べ伝えられることをご計画されてのこと。そのため、途絶えることなく現代に生きる私たちにも福音が伝えられている。現代、主はみことば、試練、人間関係を通して私たちを訓練されている。

III. 主の選びの素晴らしさ

イエス様は弟子を十二人選ばれた。この 12 という数は、イスラエルの 12 部族に対応し、古い宗教制度（律法を守り行うことで救われる）と主イエスのメッセージに基礎を置く新しい制度（主イエスの福音を信じ受け入れるなら救われる）との連続性を示す。

「こうしてイエスは十二人を任命された。シモンにはペテロという名をつけ、ゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。さらに、アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、イスカリオテのユダを任命された。このユダがイエスを裏切ったのである。」（16-19）

イエス様が選ばれた十二弟子はどのような人たちであったか？

ペテロは、元は漁師。彼はイエス様を３度知らないと裏切った。ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネはイエス様にボアネルゲ（雷の子）と名付けられたように、気性の激しい兄弟。弟子になった彼らは、イエスを受け入れなかったサマリヤ人に対して、**「私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」**（ルカ 9:54）とひどいことを言った場面もあった。この３人の使徒を見ただけでも分かるように、イエス様はこの世の素晴らしい人たちを使徒として選んだのではない。彼らは弱さや失敗や問題を抱えている者たち。**「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。」**（Ⅰコリ 1:27）イエス様は強い者、自分の力を誇る者ではなく、あえてこの世の愚かな者、弱い者を選ばれた。これは私たちへの慰め励まし。この選びはイエス様の愛で私たちを見捨てられないお方であることが分かる。

イスカリオテのユダはイエス様を裏切り、自殺をしたことで知られている。しかし元々ユダは弟子の中で会計係であり、皆に信頼されている者。ユダは最初からイエス様を裏切ると思ってはいなかったはず。しかし、いつからかイエス様への愛、信頼が無くなり、最後にはイエス様をお金のために裏切る。イエス様はユダの心が離れていることに気づいていた。けれどもイエス様は最後まで愛を示し、悔い改めることを願っていたがユダは愛に答えず裏切った。私たちも今見てきた弟子たちのようにイエス様を知らないと言い、愛を知りつつもイエス様に背いて罪を犯す弱い者。それでもイエス様は私たちを見放さず、変わらず愛を示してくださるお方。

使徒の中に普通では考えられない関係の２人、マタイと熱心党のシモンがいる。マタイは前職が取税人でイスラエルを支配していた敵国ローマのために働く者であった。熱心党のシモンは、党の名の通り熱心な愛国主義者で、自国のためならテロや殺しも覚悟の思想を持っていた。ローマはもちろん、ユダヤ人でありながら取税人として敵国のローマに仕えている者は熱心党員にとって許されないこと。そんな２人はイエス様の弟子になる時に仕事を辞めたが、周囲は正反対の思想を持つ２人が一緒に働いていることに驚いていた。彼らだけではなく他の弟子たちも様々な違いはあったが、彼らを一つにするものがあった。それはイエス様の愛に触れ、その主への愛によって一つとされている。弟子たちはお互いの違いを見て批判するのではなく、イエス様を見ることで一致し同じ方向に歩むことができた。私たちはどうか？主にあっての兄弟姉妹でも、色々な違いが沢山ある。神は私たち人間をユニークな存在として造られたのだから、お互いの違いを否定してはいけない。イエス様は違いある私たちがイエス様の愛にいつも目を留め、一つになることを願っている。

トマスはよみがえられたイエス様を信じず、イエス様の手とわきばらの傷跡に手を入れなけれ

ば信じないと言った疑い深い者。残りの弟子たち（ピリポ、バルトロマイ、アルパヨの子ヤコブ、タダイ）についてはあまり記述がない。しかしイエス様は 12 人を適当に集めたのではない。ここから分かることは彼らの働きは前に出て人に知られるようなものではなかったがイエス様はそのような彼らの働きを必要とされた。私たちは周りと比較をして引け目を感じてしまうことがあるかもしれない。自分は特別なにかできるわけでもないし、誰もができることぐらいしかできない、いやそれすらもできないと。けれどもイエス様は決して私たちを何か人よりも優れている能力で見てはいない。イエス様は私たちの他の人よりも弱く見える部分を用い必要とされる。イエス様は様々な人を組み合わせられ一致を保たれる。
私たちは兄弟姉妹を見るときお互いに違いに目を向けてしまいやすい者。しかし一人ひとりがイエス様によって選ばれ、イエス様の愛によって滅んで当然の者であった私たちが赦され、主に結ばれている。そのイエス様を見上げることで私たちは同じ方向を歩むことができる。選んでくださったイエス様の愛に答え、お互いに愛し、認め、赦し合いつつこれからも歩ませて頂きましょう。